

『日本とは何か』

御茶ノ水女子大学、コンソーシアム、2010

要約原稿

ダヴィッド・ラブス、カレル大学

『政治、倫理と学問の関連性—幕末、明治初期を中心として』

「日本とは何か」という設問は、コンテキストとイメージ作りの問題である。それを考える際に課せられる歴史家のアプローチについて簡単に触れてみたい。

幕末時代には、知識と統治の関係が再検討され、その際、知識人の組織の不在と儒教の開放性(openness)とはどう関わっていたのか。

明治初期には、伝統的な伝来のパターンは断絶され、国家統一という政治的な目標が急速に究極の目的として掲げられた。それに関し、「実学性」についての一考察と、西洋の近代性を簡単にスケッチしてみたいと思う。日本に伝わった近代的な価値観は、伝統と、どういう点で文化的に著しく異なっていたのか。「合理主義的」とされた西洋知識の受容には、将来への信仰という観点からみると、宗教的な色彩がかなり濃厚であった。そして、最も積極的に取り入れた価値は、明治社会自身を再定義、再編成するものではなく、国を外国と比較するためのものだった。国家統一という、政治的な目標が達成された時点では、明治社会は、また固有の国民文化と固有の国民神話を手がかりに、アイデンティティを形成中であったが、その時点で、政治と倫理との従属のパターンは、幕末のそれと逆だった。